「底が突き抜けた」時代の歩き方 565

どうしてポリトコフスカヤは「これほどプーチンが嫌いになったのか?」

アンナ・ポリトコフスカヤの暗殺について、はっきりしていることがひとつある。それは、彼女が記事を書きつづけなければ、殺されなかったということだ。彼女は書きつづけた。そして殺された。このこと以上の真実はありえない。彼女は殺されたが、だが彼女の書いた記事まで殺されただろうか。こう問うことは、彼女は彼女の記事の中にいつまでも生きつづけているだろうか、と問うことに等しい。それはわからない。なぜなら、記事の中に彼女が生きつづけているかどうかを確認できるのは、もはや彼女自身ではなく、彼女のいない世界で生き（残っ）ている私たちであるからだ。はたして私たちは、彼女の記事の中にいつまでも大きく息を吸い込んでいる彼女を見つけだすことができるだろうか。つまり、彼女の記事の中から彼女を生き返らせることができるだろうか。彼女が亡くなったいま、私たちにそのことが最大に問われつづけているのを感じる。

ポリトコフスカヤは一体、記事の中でなにを書いてきたのか。チェチェンの惨状か、ロシア国家の堕落ぶりか、チェチェン問題に無関心なロシア人の頽廃～無気力ぶりか、西欧の冷淡さか……それら全部だが、そうではない。彼女が書こうとしてきたのは、そんな表面的なことではない。彼女はチェチェンの地でも、ロシア国内でも、人間とはどのような存在であるかを記録してきたのだ。人間の愚かさが底なしであれば、人間の崇高さも際限がない、そのような人間の目も眩むような凄まじい振幅を目に焼きつけて、記事を発信してきたのが伝わってくる。彼女が「チェチェン問題」というとき、それは単にロシアの辺境の地コーカサスのある地域で果てしなく行われている凄惨な戦闘状況を指しているだけではない。同時に、ロシアが「チェチェン問題」を惹き起こしたとき、ロシア国内にも「チェチェン問題」が発生していることを見つめていたのである。

「チェチェン問題」は、アフガン～イラク情勢の中にも見出されないだろうか。「チェチェン問題」とは、世界の「アフリカ化」のロシア的な別名でないとどうして言えるだろう。それらは平行して加速されているではないか、という声が彼女の記事の中でたえず鳴り響いている。そう、ロシアの「チェチェン問題」は世界の「チェチェン問題」にほかならないことを、彼女は不断に主張しつづけてきた。日本が「チェチェン問題」と無関係であるなどと、どうして言えるだろう、異なるかたちをとって「チェチェン問題」が目立たずに浸透しつつあるのではないか。

もう一つの声も、彼女の記事から注意深く聞き取る必要があるだろう。その声は、スラヴォイ・ジジェクが《真の変革は苦痛に充ちたものなのだという自覚こそ、今日必要とされているのではないか》と語っていたことと、どうしてもかかわってくる。

ポリトコフスカヤは生前の最後の著作となった（ロシア語版はロシア国内で発行されていない、とはいえ、その記事の多くは彼女が所属するロシアの新聞「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙で公表された）『プーチニズムー報道されないロシアの現実』の中の最終章「プーチン再選」の次の冒頭に、彼女のもう一つの声を聞くことができる。

《私はなぜこれほどまでにプーチンに引っかかってしまったのだろう。プーチンについて本を書くほど彼のどこが気に入らないのか。私は彼の政敵でも宿敵でもない。ロシアに暮らすただの一女性だ。４５歳になるモスクワ市民で、１９７０年代から８０年代、旧ソ連の目を覆うばかりの共産主義体制の腐敗、凋落ぶりを見てきている。またあの時代に戻りたいとは露ほども思っていない。

2004 年 5 月 6 日、私はこの本の最終章を書こうとしている。明日ですべてが終わる。何の奇跡も起きなかった。3 月 14 日に大統領選が行われたが、その結果に対して目立った異議申し立ては出ていない。野党はおとなしく引き下がった。したがって、明日はプーチンの二期目の始まりだ。70 パーセント強という信じ難い得票率で大統領は再選を果たした。20 パーセントを粉飾（つまり、得票操作）として差し引いても、十分大統領の地位を確保するだけの票数を得ている。

プーチンはソビエトＫＧＢ中佐の典型だ。ゴーゴリ著『外套』（主人公の小役人は金を貯めてやっとの思いで外套を新調したものの、初めて着た夜、追い剥ぎに取られてしまう。悲嘆のあまり彼は死ぬが、町に幽霊が出没して、生前冷たい仕打ちをした上司の外套を奪う）の主人公、小役人のアカーキー・アカーキエヴィチを彷彿とさせる。その彼があと数時間でロシアの玉座にふたたび上る。彼の世界観は彼の階級に見合って偏狭だ。いかにも最後まで大佐にはなれなかった中佐らしい。好感の持てない個性の持ち主なのだ。たえず仲間を詮索するソビエト秘密警察の根性が骨の髄まで染みついている。しかも執念深い。野党はひとりも宣誓式に呼ばれなかった。ほんのわずかでも彼の機嫌を損ねたことのある政党も同様だ。

ブレジネフは嫌悪すべき人間だった。アンドロポフは少なくとも見せかけは民主的だったが、残忍だった。チェルネンコは間抜けで、ゴルバチョフはロシア人に毛嫌いされた。エリツィンはやることがでたらめで、往々にして人びとを混乱に陥れた。

こうして神様が現れた。明日、第２５梯団の護衛（要人の自動車パレードの護衛として非常線を敷く）に守られ、〝アカーキー・アカーキエヴィチ〟プーチンがクレムリンの玉座の間に敷き詰められた赤絨毯の上を主人面で闊歩する。周りでは磨き抜かれた黄金が帝政ロシア時代さながらに燦然と輝き、僕（しもべ）たちが追従笑いをする。彼の仲間、プーチン政権下でしか要職には就けないようなＫＧＢの下っ端が悦に入る。

革命後の１９１８年、降伏したクレムリンに到着した時、レーニンは同じように気取った足どりで歩いた。共産党の公式記録によると（この国にはほかの記録は残っていない）、レーニンは実に慎み深く歩いた。しかし、この慎み深さはもちろん尊大さの裏返しだ。慎ましやかな私を見るが良い！　私は取るに足りぬ人間だと思われていた。だが私はやってのけたではないか。狙いどおりロシアを打ち負かした。帝国を足許にひれ伏

させたのだ。

われらが元ＫＧＢスパイは以前の職においてさえ目覚ましい働きは見せていない。しかし明日はレーニンよろしくクレムリンを気取って歩くだろう。世間に仕返しをするに違いない。》

ポリトコフスカヤはここでなにを言おうとしているのか。《１９７０年代から８０年代、旧ソ連の目を覆うばかりの共産主義体制の腐敗、凋落ぶりを見てきている。またあの時代に戻りたいとは露ほども思っていない》のに、またもやプーチンの再選によって同じことが繰り返されようとしている、と嘆いているのだ。我々ロシア国民は共産主義独裁体制の非人間的なさまざまな仕打ちにさんざん泣かされて、ようやくゴルバチョフの手で行われたペレストロイカ（改革）やグラースノスチ（情報公開）を味わい、自由なるもののすばらしさをついこの間まで歓喜してきたのではなかったか。自分の人生を自分の手で選びとることの出来る時代の到来を、諸手（もろて）を挙げて歓迎したのではなかったか。収容所群島のソ連時代の苛酷さを骨身に染みている世代は、まだ多く生存している筈だ。どうして同じことが繰り返されようとしているのか、という声がここから聞こえてくる。

《ロシア国内でも世界的にもプーチンの勝利は堅いと見られていた。２００３年１２月７日の議会選挙では、民主主義的、自由主義的な野党が惨敗を喫している。したがって、３月１４日の選挙結果に驚いた人はまずいなかったと言って良い。政府は国際監視団を招いたが、選挙戦はさっぱり盛り上がらなかった。独裁的で官僚的なソビエト時代の選挙では、人々は意思を表明するふりをしたが、今回の選挙自体これの現代版にすぎない。私をはじめ昔を覚えている人は多い。ソビエト時代のやり方はこうだった。私たちは投票所に行って、投票用紙を投票箱に入れる。だが用紙に誰の名前を書くかに思い悩む必要はなかった。結果は選挙の前から決まっているからだ。

今回、人びとはどう反応したか。２００４年3月１４日、人びとはソビエトの悪習が戻ってきたと飛び起きただろうか。いや。彼らはおとなしく投票所に行き、投票箱に投票用紙を投げ入れ、肩をすくめた。「どうにも仕方がないじゃないか」。誰もがソビエトが戻ってきた、そして自分たちがどう考えようと事態は変わらない、と確信していた。》

彼女は続けてこう書く。あらゆる大きな世界史的な事態は、一度目は悲劇として、二度目は茶番としてあらわれるといったマルクスの言葉をここで思い出すべきだろうか。いや、二度目も悲劇として、ただし、底なしの諦めと共に、と付け加えなくてはならないだろう。《自分たちがどう考えようと事態は変わらない》という確信だけが人々に深く刻み込まれているのだ。ソビエト時代が８０年近くも続いたために、人々は支配者側にすっかり馴らされてしまって、自分たちの力で起ち上がるということができなくなってしまったのだろうか。なるようにしかならないと打ちひしがれているのだろうか。あるいは、ロシアの外から希望の風が吹き付けてくるのを首をすくめて、ひたすら待っているだけなのだろうか。もしかすると、考えられないことだが、自体に満足しているの

かもしれない。ポリトコフスカヤは更に続けて書く。
《３月１４日、私はモスクワのドルゴルーキー通りにある自宅近くの投票所の外に立っていた。エリツィン時代に、この通りはカリャーエフ通りから改名されていた。帝政時代にはテロリストと考えられていたカリャーエフ（２０世紀初頭、社会革命党のカリャーエフは皇帝の叔父にあたるセルゲイ大公を暗殺した）は、その後革命家と見なされるようになった。ボリシェヴィキがやって来る前、カリャーエフの時代にこの通りに屋敷を所有していたドルゴルーキー公爵にあやかって、通りは改名されたのだ。
　投票所に入り、そそくさと投票ごっこをすませて出てくる人びとに私は話を聞いた。彼らは無気力で、プーチンを二期目の大統領に選ぶという行為にまるで無関心だった。「あいつらがおれたちにそうさせたいんだろ？　なら、いいじゃないか」。それが大方の意見だった。少数派は冗談を飛ばした。「今度はここをまたもとのカリャーエフ通りに戻すんじゃないか？」
　プーチンの権力の強大化と共にソビエト体制が戻ってくるのは明らかだった。
　ひとつ言っておきたいことがある。大きな変化が次々に果てしなく続くので、私たちは投げやりで無関心になり、すべてに倦み疲れてしまった。だが、今日のような結果をもたらした原因はこれだけではない。西側も手を貸している。わけてもプーチンのことが大のお気に入りのシルヴィオ・ベルルスコーニ伊首相の影響は見逃せない。彼はヨーロッパにおけるプーチンの擁護者だ。しかしプーチンはほかにもブレア、シュレーダー、シラクの支持を取りつけているし、大西洋を越えたブッシュからも牽制の動きはない。
　つまり、われらが元ＫＧＢ中佐がクレムリンに返り咲くにあたり、西側からもロシア国内の有力な野党からも大きな抵抗はまるでなかった。２００３年１２月７日から２００４年３月１４日のいわゆる選挙戦期間をとおして、プーチンは露骨なまでに選挙民を愚弄した。》
　ツァーリの専制に起ち上がったロシア民衆の末裔（まつえい）がこの有様なのだ。理想を掲げる情熱が干涸（ひから）びてしまっているようにしかみえない。革命後、理想の反動にしこたま痛めつけられたのだ。足腰が立たなくなるぐらい、手酷く打ち据えられてきたといってよい。もう二度と彼らは理想を追い求めなくなった。理想が残酷な現実を用意していることを知ったからだ。それでも７０数年後に桎梏（しっこく）の壁にひび割れが生じて、かすかな穴からペレストロイカの風が吹き込んできたとき、人々は理想の残酷さを忘れて有頂天になった。そして元ＫＧＢ中佐の登場によって彼らは案の定、冷や水を浴びせられることになった。舞い上がった分、地上に容赦なく叩きつけられた。そんなうまい話はなかったというわけだ。《私たちは投げやりで無関心になり、すべてに倦み疲れてしまった》というとき、人々の肩の上に共産主義社会の悪夢ががっしりと伸し掛かっているのを認めないわけにはいかない。
　プーチンは誰かと論争したこともないし、政権一期目の４年間、自分の政策を一度も語ったことがない。

《プーチンが討論を拒んでもまともな抵抗はまったく起きない。／抵抗がないために、プーチンは当然厚かましくなった。彼が権力にしがみついて自分のやり方をごり押ししているだけだ、彼が何も気にせず、何にも反応していないと思ったら大間違いだ。》

レーニンの秘密警察「チェーカー」の手法で《彼は目に入るものをよく見ているし、きちんとそれについて考えてもいる。私たち国民、自分が支配している国民によく目を配っている。》彼はそのような体制をつくり上げているし、もっと強固に完璧な支配の網の目を張り巡らせようとしている。

《プーチンには支持者や後援者がいる。彼を二期目の大統領に祭り上げることで利益を得んとする者、大統領府に現在群がっている者たちだ。今この国を支配しているのはこの人たちだ。大統領の決定を実行する政府でもなければ、彼が望む法律を闇雲に通過させる議会でもない。彼の配下は社会の反応を注意深く見守っている。彼らが国民など気にしないと思うのは見当違いだ。今起こっていることに対しての責任は私たち国民にある。まず私たちにであって、プーチンにではない。彼や彼のシニカルなロシア統治に対する私たちの反応はせいぜい台所の噂話に留まっている。そのために彼はこの４年間やりたい放題だった。社会のあきらめムード、これは底なしだ。これがプーチン再選の免罪符なのだ。私たちは彼の行動や発言に無気力な反応を見せたばかりではない。びくびくと怯えた。チェーカーが権力を握るにつれ、私たちはやつらに恐怖心を見せてしまった。そこでやつらはますます図に乗り、私たちを家畜のごとく扱う。ＫＧＢは強い者だけを認める。弱い者は食い殺す。私たちがそのことを一番よく知っているはずではないか。》

ポリトコフスカヤは、プーチンがどのような人物であるかを次のように描いてみせる。

《彼は討論、わけても政治討論という概念をまったく理解できないことを何度も露呈している。自分より劣ると考えている者の意見など必要としない。もし自分より劣る者が意見を述べたとしたら、その人物は敵なのだ。ところで、プーチンは故意にこう振る舞っているわけではない。生まれながらの暴君でもない。ただＫＧＢに植え付けられた基準でしかものを考えられないのだ。彼はＫＧＢという組織を理想的なモデルと考えており、一度ならず公の場でそう明言している。自分と意見が合わない人間を見つけるとすぐに、プーチンが断固として「ヒステリーを起こすのはやめろ」と言うのはそういうわけだ。大統領選前の討論に参加しないのはそういうわけだ。討論は彼の本領ではない。会話というものを理解できないのだ。彼の得意技は軍隊式の独白だ。階級が下である限り、口を閉ざせ。偉くなってから独白しろ。そして同意するふりをするのは部下の義務なのだ。これは軍隊内でのいじめの構造をイデオロギーに移したもので、時折ホドルコフスキーの場合のように物理的な殲滅に到る。》

３月１４日がやって来て、プーチンは予定どおり再選され、「ロシアの玉座」に収まった。その少しあとの４月８日、チェチェンでバサーエフを捕らえるのに躍起となったロシア軍は、ミサイル攻撃でリガフという《農園にいた母親と５人の子どもすべての命を奪った》。父親は２９歳の妻マイダトが《４歳のジャナチ、３歳のジャラダト、２歳

のウマール-ハジ、そして小さな９か月のザーラをかき抱》き、傍らにザーラの双子の姉妹《ズーラの小さな体が横たわってい》るのを目にした。全員が《シャヒード、つまり信仰による受難者であると宣言》され、その夜、埋葬された。この惨状を記したあと、ポリトコフスカヤは《どうして私はこれほどプーチンが嫌いになったのか？》と自問して、こう自答する。

《それは年月が過ぎているからだ。プーチンが初めて大統領になるために始められた第二次チェチェン戦争はこの夏で５年になる。それなのに戦争はいまだに終わる気配がない。戦争が始まったとき、のちにシャヒードと宣言されることになる子どもたちはまだ生を受けてもいなかった。しかし１９９９年以降、爆撃や掃討で命を落とした子どもたちの殺人事件は未解決のままであり、法と秩序を司る機関による捜査も行われていない。嬰児殺しの犯人たちは本来立つべき被告人席に立たされていない。あの「すべての子どもたちの親友」のプーチンは犯人たちを被告人席に立たせたことは一度もない。軍部は開戦直後に許されたとおりチェチェンを跳梁跋扈している。まるで、彼らの作戦はまったく子どもも大人もいない、無尽の訓練場で行われてでもいるかのように。》

チェチェンで５人の子どもたちが殺されていた頃、世界ではどのようなことが起こっていたか。《イラクで人質が殺され、ほかの国や国民は国際機関や政府に直訴した。任務遂行中に捕捉された人びとを救い出そう、そのためには軍隊を退却させるように、と。なのに、ロシアでは静かなものだ。子どもたちが殺され、死後シャヒードの列に加えられても、軍の撤退の要求は起きなかった。対話へ、和平への道を探るためにチェチェンで何が起きているのかをただちに討議しようという要求すらなかったのだ》と、憤りをみなぎらせて彼女はもう一度繰り返す。

《どうして私はこれほどプーチンが嫌いになったのか？　はっきり言おう。それは重罪より性質（たち）の悪い単純さ、シニシズム、人種差別、嘘、果てしない戦争、「ノルド・オスト」劇場占拠事件で使ったガス、彼の一期目をとおして続いた罪のない人びとの虐殺のためだ。なくてもすんだはずの多くの死体のせいだ。

これが私の考えだ。ほかの人には違う考えがある。子どもたちの殺害も、プーチンの任期を十年に延ばそうとする人びとの努力にブレーキをかけることはなかった。》

プーチンは、《なくてもすんだはずの多くの死体》を積み上げただけではない。まだ生きている者をも、これからの死体の山に次々と放り込もうとしている、とこう示唆する。

《プーチンは偶然のいたずらで絶大な権力を持つに到ったが、それを濫用してロシアにとって破滅的となる結果をもたらすのだ。私がプーチンを嫌いなのは、彼が人びとを嫌っているからだ。彼は私たちを蔑んでいる。私たちは彼の目的のための手段、偉業を成し遂げて権力を維持するための手段であり、それ以外の何ものでもない。だから私たちをどう扱おうと、どう弄ぼうと、必要とあらば破滅に追いやろうと勝手だと思っている。彼にとって私たちは人間ではないが、偶然の成り行きでヒエラルキーの頂点に上り詰めた彼自身は、今日、皇帝であり神様なのだ。

ロシアには、これまでにもこうした指導者が何人もいた。それは悲劇を生み、大量の犠牲者を出し、内戦につながった。私はそんなことは望まない。だからロシアの玉座へと向かってクレムリンの赤絨毯を闊歩する典型的なソビエトのチェキストが嫌いになったのだ。》

ポリトコフスカヤの《どうして私はこれほどプーチンが嫌いになったのか？》という自問は、もちろん、〝どうして私はこれほどプーチンのような指導者を次々と生みだすロシア社会が嫌いになったのか？〟という自問として聞き取ることができる。《プーチンは偶然のいたずらで絶大な権力を持つに到った》と彼女は言うが、ロシア社会はそのような「偶然」を用意して、自体を破滅へと追い込もうとするのだ。ロシア社会がプーチンの登場によって破滅へと加速していくなかで、プーチンの《目的の為の手段、偉業を成し遂げて権力を維持するための手段》として、ロシアの人々もチェチェンの人々と同様に、破壊的な死へと駆り立てられていくが、ポリトコフスカヤが《どうして私はこれほどプーチンが嫌いになったのか？》と繰り返し書き付けた後に、「おわりに」と題する文章の冒頭からこう書きだしているのは、彼女の暗殺を通してみれば、非常に暗示的な気がしてならない。

《２００４年７月１０日はロシアのカレンダーではほかの一日と何ら変わりはない。だが、この日は偶然にも、この本の原稿に修正が入れられる最後の日だった。

昨夜遅く、ロシア版『フォーブス』誌のパーヴェル・フレブニコフ編集長がモスクワで殺された。社屋を出るところを狙われてのことだった。フレブニコフは新興財閥、ロシアの「ギャング資本主義」の構造、一部の人間が不正に入手した巨額の金に関する執筆活動で有名だった。やはり昨夜のこと、ヴィクトル・チェレプコフがウラジオストクで手榴弾によって吹き飛ばされた。彼はわが国の議会下院の一議員であり、この国の弱者、貧困層の味方としてつとに有名だった。チェレプコフは故郷ウラジオストクの市長選に立候補していた。ウラジオストクはロシア極東の要だ。彼は再選挙にまで持ち込んでおり、あと少しで実際に選出されるところだった。選挙事務所を出たところで、仕掛け線によって起爆された対人地雷に吹き飛ばされた（チェレプコフ候補は負傷した上に、裁判所によって立候補の登録を抹消された。決選投票では、政府寄りのニコラエフ地方議員が当選。彼にはマフィアとの黒い噂がある）。》

ジャーナリストのフレブニコフが殺され、政治家のチェレプコフが手榴弾に吹き飛ばされたと書きながら、ポリトコフスカヤ自身が自分の死を予見しながら語りつつあったと感じられる。彼らが殺されたり、負傷させられたり、そして自分自身が殺された後に、《そう、安定がロシアにやって来た。極悪非道な安定だ》と書き刻んでいたと読み込まなくてはならない。

《この安定の下では、誰も裁判所に正義は求めない。裁判所は隷従と派閥根性の巣窟だからだ。判断力のない人ならともかく、正常な人ならば誰ひとり法と秩序を司るべき機関に保護を求めたりはしない。彼らは腐り切っているからだ。今日、人の心も行動も私

刑の掟に縛られている。目には目を、歯には歯を、だ。大統領自身、良いお手本を示した。わが国の代表的な石油企業ユコスのミハイル・ホドルコフスキー社長を刑務所に入れ、その隙に会社をたたき潰した。プーチンはホドルコフスキーに侮辱されたと感じて、報復したのだった。だが彼個人に報復するだけでは気がすまなかった。ロシアの国庫のために金の卵を産みつづけているアヒルの首を完全に絞めてしまった。ホドルコフスキーと共同経営者はユコスの彼らの持ち株を政府に譲渡する、だから会社は潰さないでくれ、と頼み込んだ。政府はこう答えた。「だめだな。われわれはもっと欲しいんだ」。７月９日、プーチンはユコスの親会社ユコス・モスクワの副社長の椅子に、自分の忠実な支持者マゴメド・チカノフをねじ込んだ。この元経済発展省次官が送り込まれたのはただひとつの目的のためだ。それを疑う者は誰もいない。つまり、ユコスをプーチンの息のかかった者の手に渡すためだ。市場は混乱した。投資家は保護を求め、２００４年の５、６月には私が知る実業家と名のつく者はひとり残らず資本を西側に移すのに奔走した。

彼らは実に賢明だった。７月８日、９日、１０日の三日間にわたり銀行の現金自動支払機の前に長蛇の列ができた。当局はただほのめかすだけで良かった。銀行の中には閉鎖に追い込まれるものもあるだろう、と。すると人びとはもっとも安定していると考えられているアルファ銀行（ロシアでは最大手の銀行）からすら７２時間以内に２億ドルもの大金を引き出した。

ほんの少しほのめかすだけで良い。国が卑劣な手段に出ると誰もが知っているからだ。７２時間以内に２億ドルもの金が引き出された事実は、現在のロシアの安定がいかなるものであるのかを端的に示している。》

ロシアの代表的な石油企業ユコスのホドルコフスキーに対するプーチンの無法な仕打ちに、多くの実業家は自分たちの運命を覗き込み、資本を西側に移した。市場は混乱を嫌い、安定を求めるからだ。《現在のロシアの安定》は、市場がけっして欲してない混乱の上に乗っかっているのである。市場の混乱を《現在のロシアの安定》は意に介していないだけではない。その《安定》を根底から揺るがそうとするジャーナリストや政治家を次々と排除することによって、維持されようとする《現在のロシアの安定》がつくりだされようとしているのだ。ポリトコフスカヤも屈服することなく、このロシアの《極悪非道な安定》に刃向かいつづけた。市場にもプーチン統治にもただ翻弄されるだけの、そこへの参加から締めだされているロシアの人々はでは、この《極悪非道な安定》をどう思っているのか。

《公式の世論調査によれば（これらの調査は大統領府との契約を切られたくない調査会社によって行われている）、プーチンの人気は最高水準にある。プーチンはロシアの圧倒的多数の支持を得ている。みなプーチンを信用している。プーチンがすることに賛成する。》

つまり、公式の世論調査のなかに浮かび上がる人々は、勇敢なジャーナリストや正義に寄与しようとする政治家を排除するような、市場が忌避する無法によって成り立つ《現

在のロシアの安定》を支持していることになる。そうだろうか。本当にそうだろうか。自分たちを嫌っているプーチンに心底から手を振っているのだろうか。ポリトコフスカヤは、《私たちはブレジネフの「停滞期」（ブレジネフは１９６４年から８２年という長期にわたって保守的で相対的に安定した内政を敷いたが、経済が停滞した）からスターリンのあからさまな独裁へと退行している。私たちが己にふさわしい政府を載いていると考えるのはあまりにも恐ろしい》と書くが、彼女のそのような思いは孤立しているのだろうか。いや、けっして孤立していないことを彼女はたとえば、２００２年１０月２３日に起こったモスクワ劇場占拠「ノルド・オスト」事件で巻き添えになって命を落とした２００人近い観客の関係者を取材するなかで、感じ取っていた筈だ。

《ロシア社会はもう３年近く沈黙したままだ。大半の人はチェチェンでのわが軍の行状を黙認した。もっとも、人びとの中にはこう言う者もいた。自分の国のある地域でいったん始めてしまったことをやめるわけにはいかないんだから、いずれはロシア社会に跳ね返ってくるんだよ、と。だが、大方の人はこれも無視した。

「ノルド・オスト事件」の被害者やそこで亡くなった人びとの家族は、チェチェンの人たちとまったく同じ扱いを受けている。「文句を言うんじゃない」と諭される。「こうするしかないんだ。社会の利益が個人の利益より大切なんだから」

いや、彼らはチェチェンの一般市民よりはまだましかもしれない。５万から１０万ルーブル分だけ。政府は今回少なくとも葬儀代だけは搾り出したから。チェチェンではこんなものもなかったのだ。

ロシア国民の反応はどうだったか。同情はあまり集まらなかった。同情は政治的に意味のある感情なので、政府にとっては無視できない。だが、今回の反応はまるで正反対だった。腐りきった社会では人は己の安らぎ、平和、穏やかさを追求し、そのつけを他人の生命で払おうが何だろうが気にも留めない。「ノルド・オスト」事件の悲劇から逃れようとし、真実より国家の嘘八百を信じる。》

少なくともチェチェンでやったことが《ロシア社会に跳ね返って》きて、取り返しのつかない被害を蒙った人々、《「ノルド・オスト」事件の被害者やそこで亡くなった人びとの家族》は、「こうするしかないんだ。社会の利益が個人の利益より大切なんだから」という論法が、「個人の利益」は「社会の利益」にほとんど吸い上げられていくばかりで、「社会の利益」はほとんど「個人の利益」に還元されていかないことを意味していることをつくづく思い知らされていたにちがいない。《腐りきった社会》でロシア国民が、《「ノルド・オスト」事件の悲劇から逃れようとし、真実より国家の嘘八百を信じる》ことに傾けば傾くほど、事件の被害者家族は自分たちが全く別の社会で生存していることをますます痛感していた筈だ。

「ノルド・オスト」事件発生から三ヵ月後の２００３年２月８日、《劇場は人々でごった返し、華やかな祝賀ムードを漂わせている。黒の蝶ネクタイやイブニング・ドレスで装う政界の重鎮が勢揃いしている。溜息と嬌声、接吻と抱擁、政府関係者、ロシア議会

議員、議会諸党派の指導者、豪勢なビュッフエ……。
　国際テロに対するわが国の首都での、圧倒的な勝利。彼らはそれを祝っているのだった。テロが壊滅した地でのミュージカル「ノルド・オスト」の復活。これはまさにわれわれの勝利だ。プーチン派の政治家らは胸を張ってそう断言する。今日が２００２年１０月２３日以来初めての開幕だった。》
《２月８日のミュージカル復活の祝賀会で、殺人的な救助作戦中に命を落とした大勢の犠牲者が思い出されることはほとんどなかった。現大統領がそう仕向けていることだが、明らかに社会のモラルは落ちている。それはよくあるモスクワの洒落た集いだった。こういう場では祝いの名目は二の次になる。人びとは歌い、踊り、食した。多くの人が酔っ払い、みなとりとめのない会話を交わした。祝宴はいやが上にも皮肉な様相を呈した。ここはまさに大虐殺があったその場所なのだ。もちろん記録的な速さで改装されてはいたけれども……。「ノルド・オスト」の悲劇で家族を亡くした人びとは断固として出席しなかった。これが死者への冒瀆でなくて何だろう。大統領は出席できなかったものの、祝辞を送った。
　なぜプーチンは祝辞を送ったのか。ロシア国民をくじくことなど誰にもできない、ということを祝ったのだ。彼の言葉は典型的なソビエト的修辞、スターリンさながらの価値感に彩られていた。もちろん、亡くなった方々はお気の毒だが、社会全体の利益が優先するというのだ。劇場側はこれには熱意を込めてこう応えた。大統領が経営上の問題に理解を示されたことに感謝する、観客の皆様には十分お楽しみいただけるはずだ、と。ミュージカルには新たな創造的刺激が与えられたのだ。
　しかしここで、舞台の裏側を見てみよう。その死をもって大統領の「国際対テロ同盟」加入を贖った人びとのことを考えよう。「ノルド・オスト」事件で創造的な刺激を与えられることもなく、押し潰された人びとのことを考えよう。国家が今日できるだけ早く忘れようとしている犠牲者、あらゆる手段を尽くして私たちにも忘れさせようとしている犠牲者に思いを馳せよう。テロ行為に続いて起きた民族掃討の波を。そして人にとって命取りとなるような危ない新たな国家イデオロギーについて。プーチンはこれについて一度ならず語っている。「われわれは犠牲を惜しまない。惜しむだろうなどと期待するな。たとえそれがどれほど大きな犠牲だったとしても……」》
「ノルド・オスト」事件の犠牲者家族は、《プーチンやＦＳＢと敵対するのを恐れ、モスクワ市の役人は犠牲者にすみやかに医療行為を行うことを怠ったという》提訴理由を挙げて、《モスクワ市を相手取り、彼らが被った危害に対する保障を求め》た。最初の３件の訴状は二ヵ月後には６１通に上り、《要求された補償金の総額はドル換算で６千万ドルにも及んだ。原告はこれを国家による虚偽の代償だとした。原告たちが知りたかったのは主に身内の死の真相だった。それがどうしてもわからなかったのは、今回のテロに関するありとあらゆる情報をＦＳＢが機密扱いにしていたからだ。プーチンの古巣のＦＳＢも関与していたため、公判の準備は国営メディアが原告に対してプロパガンダ

攻撃を仕掛ける中で進められた。メディアは原告が国庫から平然と金をむしり取ろうとしている、身内の死で金儲けしようとしている、と非難した。モスクワの一流の弁護士たちはみな尻込みし、「ノルド・オスト」関係者の事件を扱ってはくれなかった。クレムリンの怒りが恐ろしいのだ。弁護を引き受けたイーゴリ・トルーノフは報道機関にさんざんにこき下ろされた。
「ノルド・オスト」事件をめぐる提訴をかわそうと当局はあらゆる広報手段を駆使した。彼らの言い様は、あたかも当局は被告人ではなく被害者であるかのようだった。》
　しかし、ロシア社会で国家を相手取った裁判がどのような結末を辿るのかは、火を見るよりも明らかである。
《この国の司法文化は、王さまが何も身につけていなかったというあの童話のように、本当は何も存在していないのだ。私たちはみなゴルバチョーヴァ裁判官の立場を知っている。彼女を雇った連中は、彼女の給料を支払っているのは税金を納める私たちではなく自分たちだと考えている。連中は実際に彼女の職も特権も取り上げることができる。一方、収入の少ない市民より良い生活を彼女に保証することもできる。ここで、彼女には不運な犠牲者の訴状をすべて却下する以外に選択肢はないと仮定しよう。
　仮にそうだとしても、彼女はどうしてこれほど無礼なのだろう。どうしてこれほど人を嘲り、なぶり者にするのか。辛い思いでいる人をいたぶるのが楽しいのだろうか。モスクワ市の財政のためにこれほど熱心に働くゴルバチョーヴァ裁判官とはいったい何者なのか。
　国に牛耳られた報道機関やテレビ局の中にだって、「ノルド・オスト」事件の公判について人びとの側に立った意見を表明した人がいただろうとあなたは思うかもしれない。とんでもない。メディアは毎日のようにこう主張した。国家の利益は個人の利益より優先されるべきであり、ゴルバチョーヴァ裁判官は国家の利益を守っている、したがって政府は裁判官を支持する、と。》
　どうしても《国家の利益は個人の利益より優先されるべきであ》る、という考えに行き着く。ポリトコフスカヤは《これがロシアの新しいイデオロギー、プーチンのイデオロギーだ》と言うが、ソビエト時代もこの考えに支配されてきたし、この考えが９・１１以降の世界に行き渡っていることを考えると、《新しいイデオロギー》というわけでもない。もちろん、「ノルド・オスト」犠牲者家族の主張は《個人の利益》ではなく、したがって《国家の利益》と《個人の利益》の対立の範疇にない。彼らの主張は個人の生存を犯すような《国家の利益》そのものを問うているからだ。国家は「ノルド・オスト」の犠牲者の救出に最善を尽くさなかったことにおいて、《国家の利益》を損なったのである。ポリトコフスカヤは、国民の保護に最大の努力を払わないような《国家の利益》を独占的に私物化している《プーチンのイデオロギー》に真っ向から敵対して、暗殺を余儀なくされたという以外のなにものでもない。

２００６年１１月１７日記